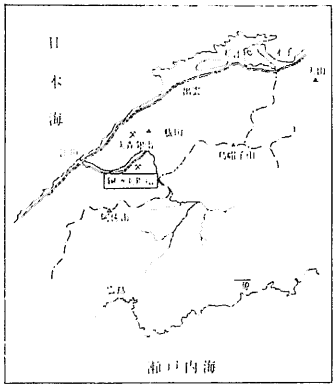


位置図

銅ヶ丸鉱山むかしむかし

はつとり　とみお

銅ケ丸鉱山は島根県にある.

中国地方第1の大河　江川(ごうのがわ)の中流南岸にある古い鉱山で　その歴史は有名な石見(いわみ)国大森銀山よりも3年ふるい永享3年（西暦1431年）の切明けにかかると伝えられている.　このヤマが銅山であることは　名前をみただけでわかるであろう.

かって戦国時代（弘治－永禄年間　西暦1958～1969）に小笠原氏と佐和氏とが銅ケ丸の鉱山をめぐって　しばしば合戦をしたといわれている.　鉱山の所在地は　いまは邑智郡邑智町今津であるが　以前は吾郷村に属していた.

吾郷村史によると

旧幕時代は天領直轄にて　附近一帯　山から谷　谷から山へと家を建てつけ　千軒と称して　随分隆盛をきわめた模様である

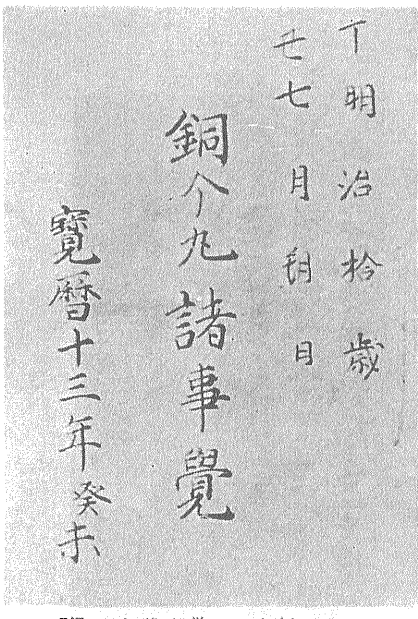
という.　昭和36年5月に　たまたまこの銅ケ丸鉱山へ調査に行ったとき　邑智町乙原(おんばら)の医師　天津義晴氏のご好意で　今を去る198年前の古記録があることを知りその写本を一見する機会を得た.　ところが写真でもわかるとおり　昔の万葉ガナで　さらさらと墨書してあるのでなかなか読めず　川本町法隆寺の岩義香和尚をわずらわして　ようやくそのほとんどを判読することができた.

「銅ケ丸諸事覚」は宝暦13年（1763）に今津の権左ヱ門という人が書き残したもので　寛文年間（1661～1672）以降約1世紀にわたる間の諸事項が記されているそれから114年を経て明治10年（1877）に写本された.だれが写したかはわからない.

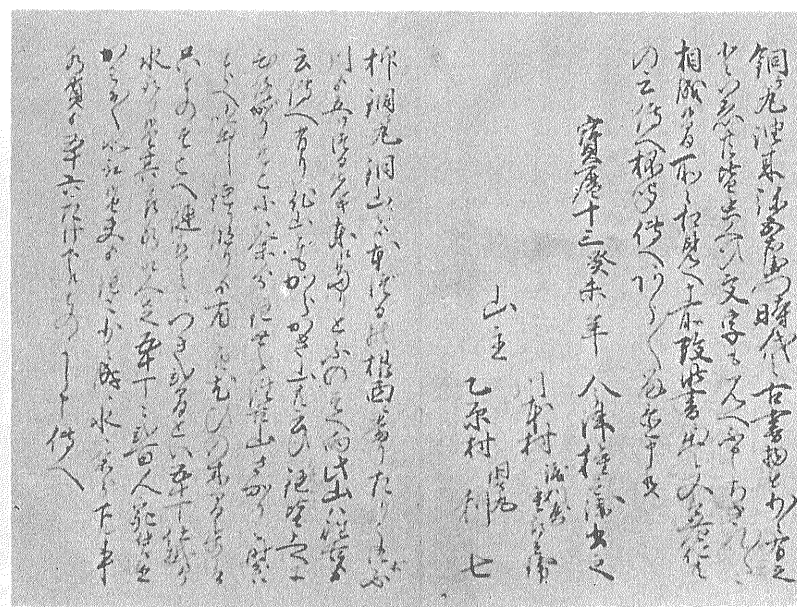
銅ケ丸由来　弥五右ヱ門時代の古書物も少々有之といえども　皆虫くひ文字も見へ不申　ちぎれちぎれと相成候間所々相見へ申所　致此書ニ出し　又は老仁共の云伝へ杯聞伝へ　あらあら留置申候

宝暦十三癸未年　　今津　権左ヱ門　出之

山主　川本村　渡利屋　重郎左ヱ門
　　乙原村　銅ケ丸　利　七

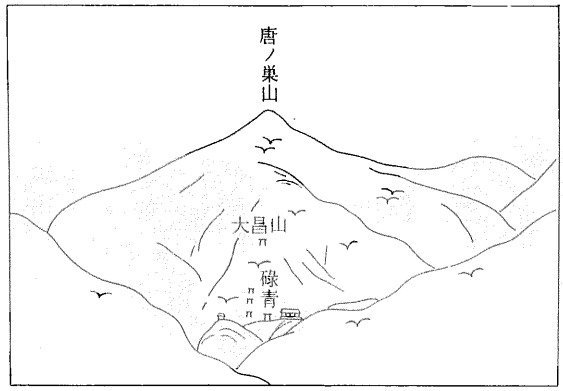


「銅ケ丸諸事覚」の表紙



「銅ケ丸諸事覚」のまえがきとはじめの文章

抑　銅ケ丸銅山者　本ずるの根西に当りたり　うすおぶ川より立ツする先キ　東に当り　とふのすへ向此山ハ往古より云伝へ有り　花山ともからかき山共云ひ　鏈(くさり)皆上へにひろがり　そこには余分鏈無之　往古山さかりの時分は　そらへ吹出し　鏈り明りより有之由　尤(もつとも)　ひの木間歩は　只そこへ鏈直しにつき　弐間とい五十丁仕掛け　水取候由　其節水取人足五十丁に弐百人宛付け置　かわるがわる水取候由　夫より鏈も少に成　水は余分下ル事　水貫より五十六たけ下ルとのよし申伝へ



曾箇谷の方面から銅ケ丸鉱区を望む（浜田図幅説明書から）

というような調子で書きしるされている．　上の文章で鏈というのは鉱石のことである．　銅ケ丸鉱山では地表近くにしか鉱石はないので　盛んな時分には露天掘りが主であった．　ただ　ひの木間歩は下の方へ鉱石が直っていたので　二間樋を50丁仕掛けて水を揚げた．　50丁の樋に200人の水取人足がついて　交替して水を揚げた　だんだん鉱石も少なくなったが　水貫坑道より56丈（約170 m）　も掘下ったといわれている　というのである．

銅ケ丸相成候時分知れ不申候　寛文年中迄ハ少々宛相成申由　然れ共鏈多く無之よし申伝へ候

銅山の経営稼行は容易なことでなかったようで　「銅ケ丸諸事覚」　にはあまり景気のよいことは書かれていない．　銅ケ丸半分の六代目山主である磯右エ門は一生懸命に探鉱したが　どうしてもうまくゆかずに病死してしまった．　それで磯右エ門の父の弥五右エ門を今津に引越させて　塩・味噌・飯米などを御公儀から支給して一生養うことにした　とか

銅ケ丸の山師　伊藤仁右エ門はもと竹谷の城主の末孫だが　銅山がうまくゆかないので　備中の五郎助に田畑を預けて　妻子を引連れて久喜大林へ行って山かせぎをした．　それから諸所の山へ行き　ついに四国伊予の足谷銅山で死んだ．　妻子は故郷の柳原へ帰った　とか．

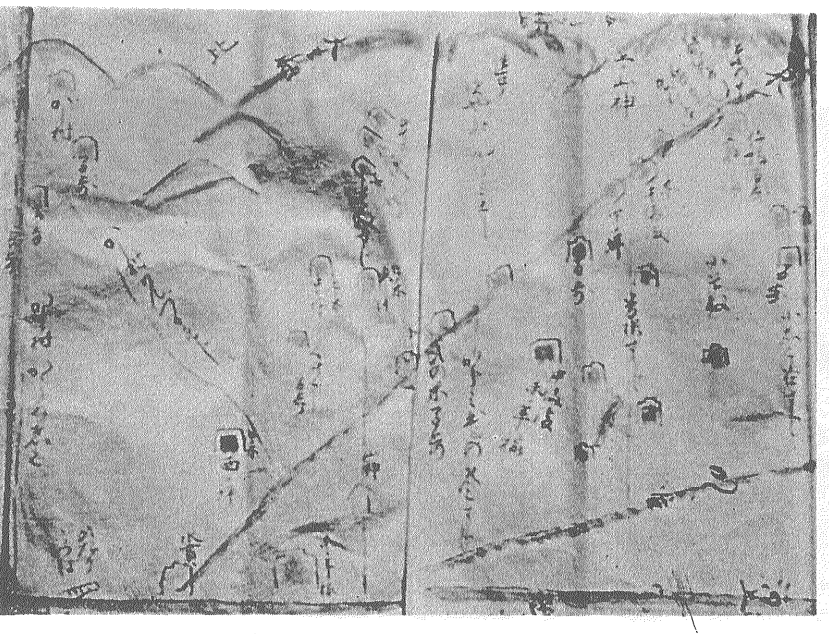
延宝元年時分よりハ一向相成不申　山子共も随分古間歩迄吟味仕り候へ共　何とも渡世不相成　諸所へ□逃のき申候由

延宝元年　すなわち西暦1672年のころには　どうしても銅山では飯を食ってゆけなくなって　鉱山の連中も皆ちりぢりになってしまった．

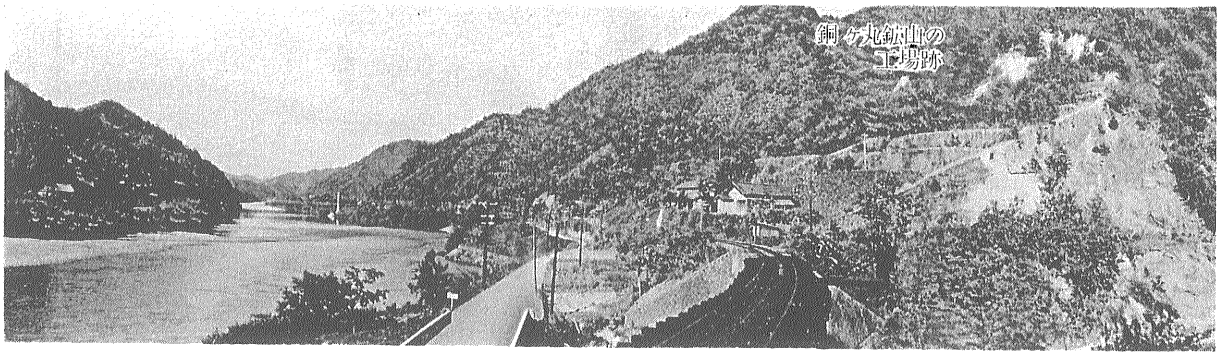
銅山には生木は生えないといわれたこの山にも木が生え　久しくたってことのほか大木になったので　銅ケ丸の百姓　治右エ門と善右エ門は自分の山で炭を焼き　御公儀に鈩(たたら)床請を願い出て　鈩山となった．　銅山変じて鈩山となる．　すなわち砂鉄製鉄に転業したというわけである．（鈩山については「出雲砂鉄のものがたり」地質ニュース No.56 14～17頁を参照せられたい）

このころまでの銅山稼ぎの証文では　稼人の掘出した鉱石の一割を山主に渡し　残り九歩の内から上納分を御公役がきめることになっていた．　間吹銅の場合は二十歩　すなわち5％が山主の取分であった．

元禄13年（1713）に永来吉左エ



「銅ケ丸諸事覚」の付図



銅ケ丸鉱山の工場跡　島根県邑智町今津にある　江川にのぞむインクライン跡の最高所から採掘場まで鉄道馬車が通じていた

門・広瀬七郎右エ門という2人の山師が大阪からきて随分と銅山を調べていたが　遂に銀百貫目ばかりも借銀して　銅ケ丸を夜ぬけし　川本の妙船寺に一両日かくれていたが　大阪へ逃げ帰ったという.

享保17年（1732）に久喜原の茂右エ門と湊の七右エ門が備後間歩をかせいで　2年かかって銅20貫を掘ったがその後　鉱石は無くなった.

享保十七子ノ十一月廿九日　大坂　丹後作五左エ門と申大身成ル山師　山子弐人連れ来り今津に滞留仕候而　毎日銅ケ丸山中尽く見分仕り　是ハ少しも思ひ入無之よしにて　極月八日頃帰申候

その後も大阪の和泉屋嘉左エ門・和泉屋千右エ門など数人の山師が相ついで調べに来て　山中くまなく調べ歩いたが　いずれも全然見込みがない　というような有様で　この「銅ケ丸諸事覚」の記された宝暦13年の翌明和元年正月に　川本御番所山中伝八殿御出で留山に相成り乙原村役人立会のうえ封印された.

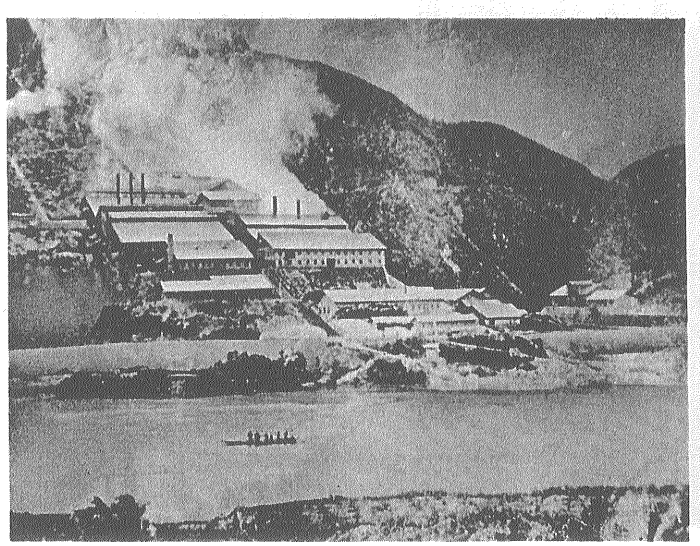
銅ケ丸鉱山は明和元年の封印以来125年を経て　再び山陰屈指の大銅山となるのである.

明治6年（1873）以降　安達惣右エ門はじめ数人の探鉱にもかかわらず　採掘見込みの立たなかった銅ケ丸鉱山は　明治20年（1887）堀伴成に買収されて　一躍大鉱山となった.　当時の生産高を記録から拾ってみると次のとおりである.

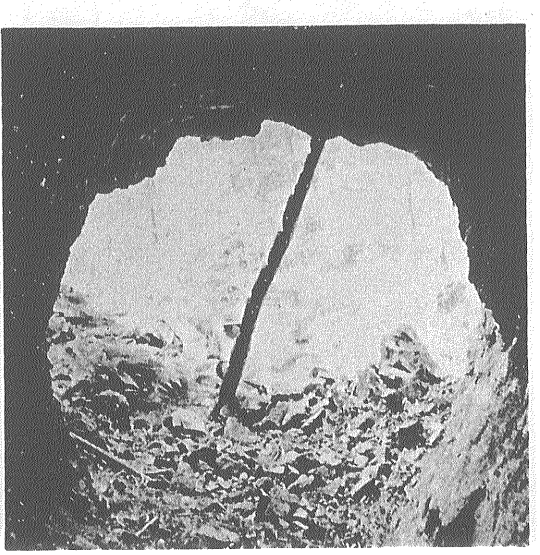
西暦	年号	採鉱高 t（粗鉱採掘量）	製出高 t（粗銅生産量）
1888	明治21	2,815.77	235.26
1890	23	6,251.91	66.70
1891	24	9,800.36	213.77
1894	27	6,544.38	282.91
1895	28	6,325.07	400.98
1896	29	6,328.86	348.86

吾郷村史によると

最も隆盛を極めたのは明治24～25年頃（日清戦争前）であった　当時電燈・電話・鉄道



明治40年（1907）ころの最盛期の銅ケ丸鉱山工場（天津医師所蔵）
江川に船着場があり　製品は船便で江津へ送った　明治42年6月1日子供の火遊びから全焼　火は付近の山林に燃え広がり　3日3晩燃え続けたといわれる



かから谷坑の旧坑
坑口にヤケがありガンギハシゴが残っている

馬車・インクライン等が設置されたが　これらは松江はおろか広島でもめずらしい設備であり　島根の近代文化がここに発したと云っても過言ではない　　春秋二回の工場慰安会では上方から名優を招き　電燈照明にて不夜城さながらの様相を呈していた

とある．　東京・横浜間に鉄道が開通したのは明治5年電話の開通したのは明治23年　有名な鹿鳴館に初めて電灯のついたのは明治19年であることから考えても　いかに銅ケ丸鉱山が当時最新の設備を誇り　盛況を極めたか想像して余りあると云わねばならない．

本山ハ‥‥舟楫ノ便多キ江川ニ沿ヒ　事務所建チ　淘汰場・製造所等連リ‥‥（鈴木敏：浜田地質図幅説明書　明治30年）

と報ぜられた．　最盛期の銅ケ丸鉱山工場の全景は16頁下掲の写真にみる通りであった．

上述の浜田地質図幅説明書によると　地質調査所鈴木敏技師が　明治29年9月に巡回した当時には

壱ケ月五萬斤内外ノ荒銅ヲ製出シ　拾六貫ニ付八十匁乃至百弐十匁ノ銀ヲ含ミ　大坂ニテ当時ノ価格三十二三円ニテアリタリ（本山ヨリ江津マデノ運賃　荒銅百斤ニ付四銭　江津ヨリ浜田マデ拾八銭夫ヨリ大坂マデ五拾銭内外ナリシト云フ）

とあるから　1ヵ月荒銅の売上代金は16,000～16,500円で大阪までの運賃は1ヵ月約410円ということになる．

明治42年6月1日子供の火遊びから　さしもの大工場も烏有と帰した．　火は工場を全焼し　さらに付近の山林に燃え広がって　3日3晩燃え続けたといわれる．このため — ばかりとはいえないが — ついに銅ケ丸鉱山は事業閉鎖　休山となった．

明治38年（1905）わが国は日露戦争には勝ったもののそのあと　国際的にはすさまじい排日運動の嵐に包まれ国内は不景気が深刻化した．　明治40年には有名な足尾銅山の大ストライキが起り　41年には国民に耐乏生活を訴えた戊申詔書が渙発された．　銅ケ丸の閉鎖された42年には日糖疑獄事件がおこり　伊藤博文がハルピンで暗殺されている．

「銅ケ丸諸事覚」の記録以後　明治6年までの120余年間については記録がないので　鉱山の状態は不明であるが　恐らく休山あるいはそれに近い状態であったと思われる．

この銅ケ丸鉱山が明治20年以降に一大隆盛をきわめたのは　鉱山主堀伴成氏の卓見と努力　また幸運もさることながら　火薬の使用・新式ポンプ・新らしい選鉱製錬技術の導入などといった欧米の新技術が　明治維新の開国によって　わが国にもたらされた結果であるといっても過言ではあるまい．

明治42年の休山以来　半世紀余を経た今日　技術革新と自由化の嵐の中で　銅ケ丸鉱山が三度世に出ることをこいねがうものである．

（資料の発表を許された田中鉱業KKに感謝する）

（筆者は鉱床部　金属課）

←
銅ケ丸鉱山の金山谷の露天採掘跡
本坑坑内から掘り抜け崩壊した